

日本は侵略国家であったのか

2009年1月6日今年初めて本屋に行って「日本は侵略国家ではない」という本を見つけた。昨年12月に渡部昇一さんの「パール判決書の真実」の感想を書いたときに自然と「航空幕僚長更迭の報道」が頭をよぎり書き留めた。

ところが、昨年末、この両者(渡部昇一、田母神俊雄)の共著として上記本が出版されていたのです。私は迷うことなくこの本を入手し、一気に読みました。この本には問題となった、田母神氏の懸賞論文の全文が載っていました。論文のタイトルは「日本は侵略国家であったか」です。短い文章の中に、日本は侵略国家ではなかったことを新しく公開された秘密文書や数多くの論文を、証拠としてわかりやすく書いています。アメリカ合衆国軍隊は日米安全保障条約により日本国内に駐留している。これをアメリカによる日本侵略とは言わない。この文章が論文の書き出しです。なるほど判りやすいですね。もし、太平洋戦争をしなければ、日本は今でも白人国家の植民地になっていたかも知れないと記してあることが小生にとっては新しいインパクトとなりました。

また、太平洋戦争はコミンテルンが仕掛けたことがより具体的に記されております。このように新しい歴史的事実が明らかになって来ているのに、東京裁判史観が今も続いているので、日本人は愛国心を強く持つ国民とはなれない。国民に愛国心が無ければ、国を守ることは出来ない。領土問題も、拉致問題もなかなか解決の道筋が得られないのもこの間違った歴史観のためである。このために間違った東京裁判史観は捨て無ければならない。日本は古い歴史と優れた伝統を持つすばらしい国であるという誇りを持つ必要がある。歴史を抹殺された国家は衰退の一途を辿るのみである。と締めくくっています。

私は正しい歴史認識を国民に浸透させ、諸外国にも正しいスタンスで交渉するためには、既成の政党では無理であると思います。新しい政党を作るかまたは最近匂いのする、政界再編のときにしっかりした青写真を持った党が現れることを期待したい。田母神さんには是非政界で活躍して欲しいと思います。

2009年1月7日